2021/11/14 (障害者週間)　七里教会　　最上光宏

「神の御業が現れるため」　ヨハネによる福音書 9:1-12

教団の暦によると、今週は「障害者週間」ということになっています。「障害者」の規定については、色々な意見があると思いますが、私は、程度の差があっても、私たちはみんな何らかの障害を抱えた「障害者」であるということが言えるのではないか、と思います。人間として完全完璧な人は、だれもいないからです。イエスさまを除いて、神さまの前に完全な人は一人もいないのです。皆それぞれに、心に体にさまざまな弱さや傷を負い、何らかの悩みを抱えているのではないでしょうか。

先週、聖書から「人は皆、土から造られ土に帰る、土の器である」ということを申しましたが、「土の器」とは、弱く脆く壊れやすいはかない存在であることを意味します。若い時には、比較的元気であった人でも、年と共に体の様々な部分が衰え、心身に障害が出てまいります。本来「障害」は、弱さと破れをもった人間が、互いにその弱さを担い合い補い合って、共に生きて行くための「絆」のようなものではないかと思います。

私が弘前におりました頃、かなり高齢の老夫婦が毎週礼拝に出ておられました。ご主人の方は、足腰はしっかりしておられましたが、目が不自由でした。奥様の方は、目はしっかりしていましたが、足腰が弱り、歩くのがおぼつかない様子でした。この二人は、いつも手を取り合い、助け合って毎週礼拝に出ておられました。ご主人が、奥様の体を支える足となり、奥様が目の不自由なご主人の目となって、共に礼拝を守っておられました。それぞれの障害が二人を一体とする絆になっていたのです。

しかし、人間の弱さや障害が、いつもお互いを結びつける絆になるとは限りません。むしろ、その障害が分断と差別を生みだしているのが現状ではないでしょうか。共に弱さを抱える「土の器」同士なのに、少しばかり強い者、障害の度合いの軽い者が、自分より弱い者、障害の度合いの重い者に対して、蔑(さげす)み、軽んじ、差別したり、いじめたりするというようなことが起こるのです。教団がこの「障害者週間」という特別な週を設けなればならなかったのも、その辺に理由があるのではないかと思います。

さて、今日のヨハネによる福音書 9 章は、生まれつき目の見えなかった盲人の癒しと、そのことを巡ってのファリサイ派の人々との論争を記した箇所です。その舞台となっている場所は、恐らくエルサレムの神殿の境内の外にあるいずれかの門のそばであったと思います。そこに、生まれつき目の見えない人が、座って物乞いをしていたのです。使徒言行録の 3 章にも、生まれながら足の不自由な人が、エルサレムの「美しい門」と呼ばれる門の前に、毎日運ばれて来て置かれ、物乞いをしていたという場面が描かれています。神殿の門の前は、そういう盲人や足なえなど、障害を担う人たちが参拝客に物乞いをする格好の場所であったようです。かつて日本でもそうでしたが、障

害を負った人々の多くは、そうでもしなければ、生きて行けなかったのです。それは社会保障制度などのない政治の貧困によるものですが、その根底に、「障害者」に対する人々の偏見と差別が根深くあったからです。エルサレム神殿の豪華さ、きらびやかさの前に、このような障害を負った人々が、「物乞い」をして生きていかなければならなかったということの中に、この世の矛盾と「闇」があったのです。

主イエスは弟子たちと共にそこを通りかかり、この物乞いをしていた盲人と出会われたのです。この箇所の直ぐ前、8 章 59 節を見ると、「ユダヤ人たちは、石を取り上げ、イエスに投げつけようとした。しかしイエスは身を隠して、神殿の境内から出て行かれた」とあります。石をもって追われるようにして神殿の境内を出られ、そこで、この盲人と出会われたのです。イエスさまは、同じように神殿を追われ門の外で物乞いをするこの盲人の悲しみと寂しさに心を寄せられ、彼をご覧になられたと思います。

その時、弟子たちがイエスさまに尋ねたのです。「ラビ(先生)、この人が生まれつき目の見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか、それとも、両親ですか」。これは、この盲人に対して、実に失礼な問いです。本人には聞こえないように質問したのかも知れませんが、この質問には、障害を負って苦しんでいる人たちに対する偏見と、差別によるものです。

ある盲学校の先生が、目の不自由な子どもたちを外に連れ出して道を歩いていた時、小さい子どもの手を引いた母親が、その子に「よくみておきなさい。ご飯のときお行儀が悪くしたり、ご飯つぶを残すとバチがあたって、あのように目が見えなくなるのですよ」と諭したというのです。その盲学校の先生は、深い悲しみと共に、教え子たちの耳にその言葉が聞き取れないように、大きな声を出して苦労したという話を聞いたことがあります。本人に悪意は無くても、何気ない言葉が、相手を深く傷つけることがあるのです。

昔から、このような障害や、難病、災害などの災難に対して、過去に何か悪いことをした結果、バチが当たったという考えがありました。因果応報という考えです。聖書に出てくるヨブは、正しい人であったにもかかわらず、自分の全財産が奪われ 10 人の子どもたちが竜巻でいっぺんに亡くなるという悲劇に加え、自分の体全身に嫌な腫物が覆うという三重の苦しみの中で「自分はなぜ、このような苦しみに遭わなければならないのか、その理由が分からない」ということで悩み苦しんだのです。友人たちが慰めるためにやって来て、口々にその原因と思われることについてあれこれ語るわけです。「お前が何か悪いことをしたからだ」とか、「お前に身の覚えがないなら、お前の親か先祖のせいだ」、「亡くなった息子・娘たちが何か罪を犯したのだ」と、理由付けをしようとするわけです。しかし、ヨブには納得できず、ますます悩み苦しむのです。そして

「神さまと直接、議論したい。なぜ、真面目に正しく生きている者がこれほどの苦しみに遭わなければならないのか」と。これは、人生の苦難・不条理に対する答えの出ない、永遠の問いなのです。

弟子たちの質問は、そのような「因果応報」の考えに基づく問いでした。しかもその問いは、自分自身の悩み苦しみの中からの問いではなく、第三者的な興味本位の問いであったのです。生まれた後で目が不自由になったのなら、本人の罪のせいだと断定できるが、生まれながらの盲目となると、誰のせいか、親のせいか？先祖の祟りか？この問いには、目の前にいる障害を負う人に対する痛みのかけらさえ見られません。

それに対して、イエスさまは何と答えられたのでしょうか。3 節にありますように、「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」というものでした。障害は、誰かの罪の結果ではない、罰などではない。むしろ、その障害を通して「神さまの御業が現れるためだ」と言われたのです。

同じ障害者を見る味方でも、弟子たちとイエスさまとは、こんなにも大きく隔たっていたのです。弟子たちは、この男の障害の原因と責任を問題とした。それに対してイエスさまは、この人の障害の意味と目的について語られたのです。弟子たちは過去を問い、イエスさまは、彼の未来について語ったのです。弟子たちの問いからは、失望と諦めしか出てこないのですが、イエスさまの答えは、生きる希望と勇気を与える言葉でした。イエスさまが「世の光である」ことの所以がここに示されているのです。

「神の御業が現れるため」。イエスさまはこう言われて、「地面に唾(つば)をし、唾で土をこねてその人の目に塗り、シロアムの池に行って洗いなさい」(6-7 節)と命じられたのです。唾で土をこねてその泥を目に塗るという処置は、いかにも不潔で原始的な治療法のように思われるかも知れませんが、私はこの処置の背後に、あの創世記に描かれている、神さまが人をお造りになった時の記述が反映されているように思います。

神さまは「土の塵で人を形づくり、その鼻にご自分の息を吹き入れられ、生きた人をお造りになられました」(2:7)。イエスさまは、父なる神にならって、新しい創造の業を行い、命の光をお与えになったのです。唾液もまた、息と同じように、命をもたらす力なのです。私が小さな子どものころ、よく転んで膝小僧を擦りむいたりすると、母親は、自分の唾液を塗って「痛いの痛いの飛んでいけ、チチンプイプイノプイ」とおまじないを唱えてくれたことを思い出します。すると、不思議に痛みが消えて、傷が治ったような気がしたものです。それが母親の愛の奇跡だと思いました。

「シロアム」という池の名前の意味は「遣わされた者」という意味です。イエスさまは、神から「遣わされた者」として、父なる神の愛の業を行われたのです。

ここで、注目したいことは、この生まれながら目の見えない人が、そのイエスさまの

言葉に従って、手さぐりをしながらシロアムの池まで行って、目を洗ったということです。この「主に従う服従」が、神の御業を実現させたのです。こうして彼は癒され、「目が見えるようになって、帰って来た」(7 節)のです。

今日のこの記事を読むたびに私がいつも思い起こすのは、青木優(まさる)という盲人牧師のことです。この青木先生は、『行き先を知らないで』という自伝的な著書の中で、ご自分の失明と、それをどのようにして乗り越えられたかという体験を証ししておられます。それによると、先生は、終戦直後に岡山医科大学を卒業して、医者になる直前、インターンの時に、突然失明して医師になる道を絶たれ、失意のどん底にたたき落とされたのです。彼は、毎日「なぜだ! なぜ今、自分だけがこんな苦しい目に遭ったのか。これからの生涯、何も見えない暗闇の中で、どうやって生きていけばよいのか、生きていく意味があるのか」と問い続け、自殺することしか考えられなかったそうです。そういう絶望的な闇の中で悶々としていた時、弟の通っている教会の牧師が訪ねて来て、お祈りして一冊の本を置いていかれたそうです。それは、自分と同じ途中失明した人の証しで、母親から読んでもらうと、その本の中に、今日のヨハネ福音書の生まれつき盲人の記事が引用されていて、「ただ、神の御業が彼の上に現れるため」というイエスの言葉に、彼はハッとしたのです。今まで、「なぜ見えなくなったのだ! なぜだ!」と問い続けて来て、誰も答えてくれなかったが、イエスが、「神の御業が現れるためだ!」と応えてくれた。イエスはこの言葉で、「お前の失明を通して、お前でなければ為し得ない神の仕事をするのだ!」と語り掛けているのを感じ、雷に打たれたような思いがしたというのです。そして、もしそれが本当なら、私は生きられる。生きて行きたい。いや生きねばならない、と思った」とその時の感動を記しています。そのようにして青木先生は、教会へと導かれ、自分にできる「神の御業」とは何か、と問い続け、「肉体の病を癒す医師から、心の病を癒す医師への道へと神さまは招いておられるのではないか」と祈りの内に示され、苦労して神学校に入られ、学友に支えられて、牧師になられたのです。牧師になられた青木先生は、岩国や小郡、調布の教会を歴任され、教会の伝道牧会に励む傍ら、心や体に障害を担う人々のために働き、晩年は「障碍を負う人々・子ども達と共に歩むネットワーク」を奥様と共に立ち上げ、最後までその代表として、障害を負う人々共に歩まれたのです。

失明という障害を通して、彼もまた、神さまの御業を現わしたのです。神さまのみ心は、私たちにとって測りがたいものがありますが、「神は愛する者と共に働いて、万事を益となるようにして下さる」のです。そのことを信じて、それぞれの賜物と個性を生かして、神さまの御業がこの地になるように、祈りつつ励みたいものです。　アーメン